



米国ボイジャーの支援で導入した電子出版ツール「エキスパンドブック・ツール・キット」と、日本独自に開発した「T-Time」の2つのデジタル出版ツールがすべての出発点

## 萩野正昭 Masaaki Hagino

株式会社ボイジャー 取締役

# 電子出版と向き合った30年

萩野正昭氏は「電子出版」や「電子書籍」という新分野を1990年代から切り開いてきた。1992年にボイジャーを立ち上げるも、資金は「ゾツとするぐらいスッカランだった」と笑う。丸腰で踏み込んで30年、自身のメディア体験史から格闘のエピソードを聞いた。

(文・写真：吉井 勇・本誌編集部)

### パイオニアでLDの映像制作

—— 30年前に電子本の制作や、その出版をやろうと考えた着眼から。

萩野 少年時代から本が大嫌い、大学卒業後は映画の仕事を11年間やっていましたが、臨時雇用で労働環境も悪く、映画産業に展望のない時期でした。そんなころ、音響メーカーのパイオニアが「レーザーデ

ィスク (LD) 」で、「インタラクティブ」という新鮮な響きの機能で映像業界に参入してきたんです。このLDを導入した当時の松本誠也社長 (故人) が話した「これからはバブリッシングの時代」というのを聞いて、「本と同じ」だと直感しました。

—— 制作したLDで印象的なことはありましたか。

萩野 インタラクティブの黎明期として制作した、NASAの宇宙開発に関する映像集『スペース・ディスク』が印象的でした。NASAが収録した事実の映像だけが脈絡なく入っているもので、実に素っ気ないんですが、自分の操作でランダムに見ていくと興味をそそられる。また、パソコン (PC) からモノクロ文字、映像のモニターにカラー映像を出しながらランダムに扱う「マルチメディア」という新しいメディアの変化も実感していました。

### ボイジャー・ジャパン設立と初のCD-ROM作り

—— ボイジャーを1992年に日本で設立し、代表取締役として22年間、経営されてきました。

萩野 会社設立にはボブ・スタインという男との出会いがありました。彼は1984年から米国でボイジャーという会社をやっていて、LDの仕事でインタラクティブの世界を見つけないかという思いが共通していたので、一緒にボイジャーのジャパンを設立しようとなったのです。

—— 動き出したボイジャーの挑戦はいかがでしたか。

萩野 CD-ROMをいろいろ作りましたが、一番印象的だったのは『A Hard Day's Night』ですかね。ビートルズの世界を、本を読みながら映像と音楽で楽しむインタラクティブを提案したものです。使った技術は「QuickTime」というApple開発のデジタルムービーで、撮影した映像全部を入れました。画像サイズは160×120と小さいものですが、映像は動いていました。CD-ROMとして仕上げた技術は「HyperCard」でした。

—— QuickTimeやHyperCardは、Apple Computer (現Apple)のMacintosh (Mac)のソフトウェア技術ですね。

萩野 Appleは「WYSIWYG」（見たままが得られる）という革新的なインターフェイスを提案していたので、抜群の存在でした。また、東京大学の教授だった故・浜野保樹さんが米留学で得た『ミミ号の航海』などのマルチメディア教材を紹介していて、これにも刺激を受けました。浜野さんは新しいメディアの登場を力強く説くとともに、無名の新参者を応援していた賢人で、彼との出会いは大きいものがありました。

## 「横書き」のPCから日本語の「縦書き」へ

—— 当時のCD-ROMは横書きです。電子の出版ですから、日本語の特徴である縦書きはどうしたのですか。

萩野 HyperCardでCD-ROMを作っていたので、当時のフォントはMacの日本語版に同梱されていた「Osaka」書体で、横書きでした。

1995年の『エキスパンドブック2』から縦書きです。この開発はボイジャーの社員、当時は4人でしたが、その中にAppleのアプリ開発用のXcodeの第一人者がいたので早くに実現できたのです。

—— 書体はどうしたのですか。

萩野 このころ、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』を出しているんですが、書体は大日本印刷の協力があって、独自の「秀英明朝体」を使っています。このデジタル版100冊には隠れたエピソードがあって、デジタルはやらないと言っている村上春樹の作品があるんです。多分、どさくさで紛れ込んだみたいです（笑）。この時、新潮社の担当で支えてくれたのが、著作権法に詳しい弁護士となられた村瀬拓男さんです。

## 文字だけと割り切った『T-Time』

—— 縦書きと出版用の書体もそろったボイジャーは、次に何を目指したのですか。

萩野 電子の世界は、ツールに要求をどんどんしていくし、いろんなことをやりたい。それがマルチメディアということになり、リッチコンテンツの追求

という金食い虫になった。僕から言えば、「デジタルの重厚長大」な道に迷い込んでいる。その心配は、お金をかけて一生懸命に作っても、OSが変わると全く動かなくなるという電子メディアの持っている根本的な弱さを感じたからです。

—— 個人のコミュニケーションの首根っこまでがOSメーカーの一私企業に握られているという脆弱性に気付かれた先見性は鋭い。

萩野 本家の米ボイジャーもあいろに入り込み、経営が厳しくなっていくわけです。私が当時、米ボイジャーに言ったことは、「お前たちはビーフシチューで、肉だ、野菜だと、こってり煮込んでいるが、俺たちは盛りそばだ」でした。そして行き着いたのが、映像もいない、音もいない、文字だけがいいという割り切りです。テキストを中心に発想したのが『T-Time』でした。この辺りが米ボイジャーと日ボイジャーの進み方の違いが見えた分岐点です。

—— 写真を撮る時、思い出の逸品を持ってくださいとお願いしたら、『T-Time』を選ばれました。帯に「インターネットが縦書きで！」とあります。

萩野 この辺りからインターネットが始まってきて、インターネットを通した「文字」を快適に読めればいいな、という発想が『T-Time』で、「HiFiテキスト・リーダー」と言ったのです。ここには一つの問題がありました。コピーガード、DRMがなかったことです。電子出版として使うために、複製防止機能を備えたフォーマットとしてデビューしたのが、『book』でした。

## ガラケーのマンガが窮地を救ってくれた

—— 資金が「ゾットするぐらいスッカスカだった」状況からどう脱したのですか。

萩野 日本独自のケータイ、ガラケーが鍵でした。当時、「こんな小さな画面で本を読むなんてあり得ない」と小馬鹿にしていたんですが、これが救世主になってくれました。パケ放題の料金となったので、マンガなどを安心して読んでもらえることから「コミック

サーフィン」サービスがヒットします。「ブックサーフィン」も登場しますが、やはりマンガの勢いがすごいんです。auプラットフォームでマンガと本ですみ分けていた会社の関係が崩れ、マンガ提供の会社からボイジャーに参加してくれという要望がありました。売り上げ全体から一定の比率をもらう契約だったので、マンガの売り上げが伸びて経営を支えてくれたのです。

—— ガラケーで味を占めたわけですね。

**萩野** 当時、大手出版社の幹部から聞いた、画面の大きさとマンガのコマ割りがポイントになりました。「マンガは、いくつかの大小のコマで構成される1つのページに著作人格権がある。いずれ画面は大きくなるから、絶対にコマに切るな」です。このアドバイスを信じてコマを切り出すことはせずに、版面スクロールを地道に続けました。これがスマホ時代につながっていくわけです。

## 2人の人物が与えてくれた「次」の考え

—— 出版のデジタル化で気付かれたことを振り返ってください。

**萩野** 新たな刺激を受けた人物は、サンフランシスコにある「インターネット・アーカイブ」の中心人物、ブルースター・ケールさんと、青空文庫の富田倫生さんです。ケールさんは若い時にとんでもないデータベースのソフトを開発し、ライセンスフィーが入るといって成功を収めた方ですが、デジタル時代における図書館、インターネット・アーカイブを提唱して、ファウンダーとなって実現させています。

インターネットのホームページを片っ端からアーカイブ化しているんです。ホームページは次々に更新されていくので、それをコピーして「ウェイバックマシン」に蓄積しています。この貴重さは、ボイジャーの初期のころのホームページなんて残っていないことを考えるとうなずけますよ。

もう一つ、Webと本のインテグレーションという主張を聞き、Webと本を区別する意味があるのか、むしろ共存することの限らない可能性に気付かされました。

—— 富田さんの青空文庫も日本版のデジタル・アー

カイブですね。

**萩野** フリーの記者でしたが、「青空文庫」という斬新な提案を呼びかけた素晴らしい志のある方でした。提唱されたのは、著作権保護期間の切れた名作をみんなで電子化しようというもので、当初はボイジャー固有の『エキスパンドブック』フォーマットで出されていて、同時にプレーンなテキストも用意されていました。テキストデータはブラウザで横書き、ルビはカッコが付いているとかで、見栄えのするエキスパンドブックの方が良かったんですが、固有のメディアフォーマットと原データ、私は「原液」と呼んでいますが、この違いというか、力関係が徐々に逆転しているのを感じていました。

—— 「原液」という言葉、電子出版にこだわり抜いた萩野さんの一つの確信に聞こえます。

**萩野** 1990年代というメディアが胎動したおもしろい時代をつんのめりながら歩きつつ、出版は共通性が求められるため、時間がかかるという2つの間でもがいてきたように思います。それでも30年続けてこられたのは、多くの人に支えられた「運」だったようにも思います。

—— さらに提案を用意されているとか。紹介してください。

**萩野** 2015年にWebでの出版に注目し、出版ツールとして「Romancer」を公開しました。7年を経て、全面リニューアル・オープンを10月に行います。自分で書く、自分で残す——これを「自立出版」と呼びます。紙の印刷がすべてだった出版は終わり、売れる紙の本を電子化すれば終わりという出版でもありません。一人ひとりの力で、この社会に残すべき人の経験や教訓、人の生きた足跡を「自分なりの本」として知らせること、これを自立出版と呼んでボイジャーは応援します。

—— これはPCを使ってWeb上で出版するものですか。

**萩野** PCでもスマホでもWeb上に展開されます。出来上がった作品にはユニークなURLを付与し、あなた自身のものになるというサービスです。誰でも参加でき、インターネット・アーカイブに永久的に残すこともできるのです。

—— 電子出版は本を書く・世に出すということの、よく言われる「民主化」ですね。ありがとうございました。

